

琉球大学学術リポジトリ

与那国島での交流・学習支援が教職意識に及ぼす影響
ー教育実践学専修1年次学生と久部良小・中学校の試みー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 玲子, 仲間, 正浩, 崎原, 用能, 東小浜, 功尚, 浅井, 利真, Asai, Reiko, Nakama, Masahiro, Sakihara, Younou, Arikohama, Kousyou, Asai, Toshimasa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18467

与那国島での交流・学習支援が教職意識に及ぼす影響

—教育実践学専修1年次学生と久部良小・中学校の試み—

浅井玲子*, 仲間正浩*, 崎原用能**, 東小浜功尚**, 浅井利真***

The influence that the learning support in Yonaguni-jima
lets you extend to the teaching profession awareness
— The trial of the educational practice studies specialization
student and Kubura elementary and junior high school —

ASAI Reiko, NAKAMA Masahiro, SAKIHARA Younou
ARIKOHAMA Kousyou, ASAI Toshimasa

I 緒言

琉球大学教育学は平成21年4月学校教育教員養成課程に小学校教員養成コース教育実践学専修を新設した。入試においては県内高校推薦枠や県内地域指定（離島・へき地）推薦枠を設けるなど沖縄県の島嶼性を意識した専修となっている。沖縄県で教員になるという事は、期間に長短はあるが、沖縄県の公立小中学校の40%に及ぶ離島・へき地校での教育に携わる事を意味する。沖縄県の場合、小学校では欠学年が存在する5学級以下の極小規模校も多く、離島だけでなく沖縄県本島北部地区を中心に年々増加傾向にある。吉田ら（2007）は沖縄県教育委員会の公立学校教職員定期人事異動の概要から、人事の方針として新規採用2校目を原則離島やへき地の学校にしていること、定年退職までに最低でも2回は離島・へき地勤務になること等を明らかにしている。一方、浅井・吉田（2009）は琉球大学教育学部生1～4年生男女281人を対象に離島・へき地教育に関する知識や特性認知を調査し、197人から回答を得たが、へき地校勤務を希望する学生は半数弱であった。また、へき地での教育の実際を何らかの形で知っている、

あるいは興味を持っている、知りたいと答えた学生はへき地での教育実践を前向きにとらえていることが示唆された。

更に、離島・僻地の児童・生徒のキャリア教育のためにも大学での取り組みが必要との認識はあるが、本実践の舞台となる与那国島へは渡航費用や滞在費の負担が大きいため、生涯教育課程島嶼文化教育コースの学生数名の交流（教育実習派遣など）に止まっているのが現状であり、小学校教員養成コースとして大学と小・中学校両方向からどのように考えていくかは大きな課題であると捉えている。

本稿は、平成21年度琉球大学「21世紀 沖縄子ども教育フォーラム」において実施した申請型プロジェクト「ドゥナンから未来へ発信 ～与那国の児童・生徒と教育学部学生の目的意識の高揚～」の一部として、琉球大学と沖縄最西端の与那国町立久部良小・中学校の双方向から、教員としての積極的進路選択・力量形成、児童・生徒の目的意識の高揚の可能性を探ることを目的として実施してきた試みの検証である。入学早期の1年次学生を対象としている事も特徴のひとつである。これまでに取り組みの具体的内容の報告（2009. 10.

* 教育学部教育実践学専修

** 与那国町教育委員会

*** 与那国町立久部良小学校

29 第2回研究会報告者：浅井利眞)や学生による実施報告ポスターセッション(2010. 3. 6 第4回フォーラム 報告者：宮里洋平他学生12人)を行ってきており、本稿はそこで報告できなかった学生の教員としての積極的進路選択・力量形成に関わる部分を中心に論じる。

本稿では、主として大学生の変化についてのみ論述するが、交流相手となった与那国島は日本の最西端にあり、東西に約12km、南北4km、周囲27.49kmの南海に浮かぶ孤島である。県都那覇より520km、石垣市より127km、外国である台湾まで120kmの国境の島で、久部良小・中学校はその与那国にある学校の中でも最西端にある学校である。生徒数は久部良小学校35人、久部良中学校22人で複式学級を持つ小規模校である。子ども達は地域に誇りを持ち、積極的に地域行事に参加し体験活動を実施している。しかし、島内に高校が無いため、義務教育終了とともに進学のために親元を離れ、寮生活や自立した生活を余儀なくされている。よって、小学校段階から、島外の情報に触れさせ、あこがれや夢、希望を持たせる必要がある。同世代の子ども達の暮らしぶりや島出身の先輩方の暮らしぶり、琉球大学教育学部で学ぶ学生とライブで交流することにより、島外へ出る場合の不安から、夢や希望、志へと変わっていくことが期待できる。さらに、琉球大学教育学部の学生(離島・僻地出身者含む)が、直に学習指導したり、交流したりする事により、これまであまり身近ではなかった大学進学を含む具体的なモデルを提示でき、更なる目的意識の高揚や主体的進路選択につなげられると考え、双方向からの効果を期待した。

II 対象者及び調査方法と内容

本取り組みは、単年度予算で行われたため、学生に単位を与えるような従来の実習や講義とは異なっている。そこで29人の実践学専修所属1年次学生に呼びかけて希望者を募るという方法をとった。渡航費と宿泊費の実費のみを予算計上し、その他の経費は自己負担であり、活動はボランティアである。1回目は10人が2009年8月22日～31日までの10日間与那国島に滞在し、午前中は小学校・

午後は中学校の夏休み基礎学習会での学習支援と子供会との交流などに参加させていただいた。2回目については、2010年2月14日～21日までの8日間午前中は小学校・午後は中学校の授業中の学習サポートとして教室で学習支援をし、地域の駅伝大会に参加したり子ども会の高校合格ウォークラリーなどに12人が参加した。具体的な内容やその時々感想、思いは図3の学生の実施報告ポスターをご覧いただきたい。1回目の参加者10人全員が2回目もぜひと参加を希望した事や小学校の先生方から、可能なら子どもたちと顔なじみの大学生を今度は授業中に支援員としてという要望があったために、ほぼ同じ学生の構成となった。ただし、インフルエンザ濃厚接触の疑いによる渡航自粛した学生1名と新しく希望をした3人が加わるなど、多少の変動があったため、本稿におけるデータは、その収集した時期と内容によって、1度目に参加した10人と2度とも参加できた9人あるいは参加者全員13人を対象とした場合がある。

以下の3つの方法で、学生の変化をとらえる。

1 イメージ変化について

8月の交流・学習支援前後に「あなたが授業や教師に対してどのようなイメージを持っているかを比喩で表現してください。たとえば 記憶は〔雲〕のようだ。なぜなら すぐに消えてしまう。こどもは〔わたがし〕のようだ。なぜなら ふわふわして夢がある というように、あなたのイメージにしたがって、たとえる言葉を記入し、比喩の説明を行ってください。比喩は、できるだけ多く作ってください」と指示し、「授業は」「教師は」「教えることは」「(空欄)」について記述させた。尚、2月については複数回記述による慣れが懸念されたため、行わなかった。

2 教職意識

「自分のつきたい職業はかなり絞れている」「就職してから役立つ知識を得る事に、大きな関心を持っている」「どのような職業でも一応はやっていけると思うので、あまり選択の幅を狭めたくないと思う」「職業の決定では、どのようなものを考慮して決めて良いのか、よく分からない」について7：全くそう思う、6：かなりそう思う、

5：ややそう思う，4：分からない・どちらでもない，3：あまりそう思わない，2：かなりそう思わない，1：まったくそう思わない からもっとも当てはまる数字にマルをつけさせた。なお、「どのような職業でも一応はやっていけると思うので，あまり選択の幅を狭めたくないと思う」「職業の決定では，どのようなものを考慮して決めて良いのか，よく分からない」は1年次においては高く出ることが予想されたり，必ずしもネガティブな項目と捉えることはないが，教員養成を目的とした課程の所属であることや教職をめざす意識という面からはネガティブ項目と位置づけ，逆転項目として算出した。よって，本データで示す場合，すべての項目において高得点なほど（レーダーチャートの外円に近いほど）教職意識は高いと解釈していく。

3 学生自身の変化についての記述

1と2を考察するに当たっては，学生の振り返りの記述を用いている。

教育実践学専修学生の4年間を通した教職意識の変化は，年次指導教員である道田によって個別の「聞き取り」方法で計画実施されているが，今回は与那国での体験前後を取り出して，自己の変化について浅井が記述させた資料を用いる。物理的に1人ずつの聞き取りが困難であったため，学生本人に「変わった項目とその理由について」記述を依頼し回収した。

III 結果と考察

1 イメージ変化

図1は交流・学習支援体験前後のイメージ数の総数の変化を示した。全体的に増えており，特に「教えることは」についての記述数は倍になっている。

具体的な記述を表1の交流・学習支援前後のイメージ変化に示した。その変化について，各人が振り返って記述した部分を交流を終えた反省記録から取り出してみる。なお，表中のABC・・・と記述の後に示したABC・・・は対応している。

前よりも後は具体的な事を書いていて，どちらかと言うと子ども目線よりも教師目線だと思いま

した(A)。

前は自分が授業を受ける立場であるが後は自分が授業をする側の立場として書くようになっていく。具体的な学校におけることが想像できるようになっていると感じる(B)。

個数が多くなった。今回学習支援をしたり，子どもたちとの交流をとおして，自分の考え方が大きく変わったからだと思います(C)。

書くときに子どもたちの顔が出てきた。自分が与那国で研修した事をふまえて書けた(D)。

前は漠然としていてあまり例が考えられませんでしたが。しかし今回は，項目を考えるたびに久部良小学校の授業や児童の顔が頭に浮かび，とても考えやすくなりすらすらと書くことができました。児童と直接関わりを持つことで，実際の現場に触れた事がとても良い経験になりました(F)。

前では私は，授業は機械のようだ(省略)と書きました。後では教えることはたまにはこのようだ(省略)と書きました。教える事，授業する事は実践で学ばないとその大変さや喜びがわからないと思う。その他も今見ると，今の私では考えられないような浅はかな考えのように感じた(H)。

前は教師は子どもにとってはとても高い存在のように書かれていましたが，後は確かに高いのだけれども高いだけでなく近い存在でもあると書きました。教える事は子どもから得る事が多いと書きましたが，今回は自分が子どもたちに与えられることも多いと思いました(J)。

これらの記述から，短期間ではあっても，児童・生徒や現場の教師と同じ場において直接関わったことは，彼らの授業、教師、教える事のイメージに

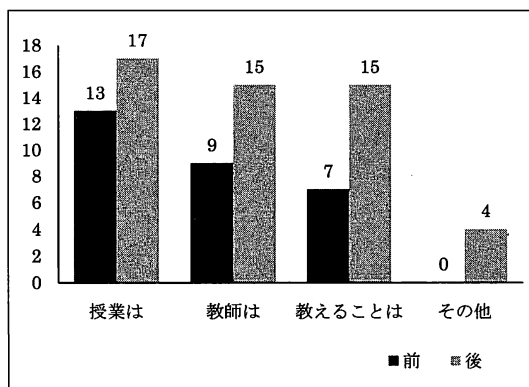


図1 体験前後のイメージ数の変化(10人合計)

表1 交流・学習支援前後の比喩表現変化

		授業は [] のようだ。 なぜなら～		教師は [] のようだ。 なぜなら～		教えることは [] の ようだ。なぜなら～		その他	
A	前	マラソンのよう だ。疲れるが最 後は達成感があ る。	キリンの首のよ うだ。長いから だ。	ウルトラマンの ようだ。たより になるから。	マラソンのよう だ。疲れるが最 後は達成感。	つなわりのよ うだ。難しいか ら。	航海のようだ。 なにが起こるか わからない。心 配、不安だから。		
	後	食事のよう だ。一回一回 がとても大事 だから。	天気予報のよ うだ。当た るときと当 たらな いときがある	図書館のよ うだ。いろん な知識を持 たないとい けないから。	タコのよう だ。柔軟な考 え方を持っ てないとい けない。	コンサートの ようだ。上 手なら反応 があるが下 手なら反応 が無い。	メビウスの 輪のようだ。 同じことを 教える、くり かえしだか ら。		
B	前	羊のようだ。時 間がたつにつれ、 眠たくなる。							
	後	くもり空の ようだ。不安 で黒くなっ ているから。	スポーツのよ うだ。多く の経験をし ることで上 手になっ ていくから。	大きなお皿 のようだ。み んなを支え られるよう な器を持っ ているから。		パズルのよ うだ。一つ一 つ違う形を 持っている し、とても難 しいから。			
C	前	たからくじのよ うだ。当たりも あればハズレも ある。たのしい (わかる)授業に あたるか、あた らないか。	キャッチボール のようだ。先生 の投げかけた質 問を生徒がうけ て答える。これ がうまくいけば、 いいふんいきに なる授業だと思 う。						
	後	くものよう だ。見えてい るのにつか めない、高い ところにあ って、まだまだ 届かないもの の。	料理のよう だ。作る人 によって味 が変わる。授 業をする人 によってう まい、へたが ある。	迷い子のよ うだ。つねに まよってな るやんでい ると思う。生 徒のためにな るやんで、つ ねにゴールを さがしてい る。	不親切なガ イドさんの ようだ。生徒 に道をつくり 案内する。だ が目的地ま でしか教え ない。中身 は生徒しだ い。	パズルのよ うだ。うまく 順序よくや らなないと、 伝わらない。 うまく型に入 らない。	じしゃくの ようだ。うま くくつつく 時もあれば、 くつつかな い時もある。 伝えたいこ とが伝わら なときにSN 極のよう にくつつけた 気持ちにな る。	生徒は複数色 のクレヨンの ようだ。1人 1人に個性が あって、1人 1人の個性を つかいこなせ ば、きれいな 絵がかけ る。合わない 人、とてもあ う人、いろい ろな個性(色) で、1人1人 がなくては困 る。	
D	前	種のような。徐 々に成長する から。							
	後	茎のようだ。 勉強の軸だ から。	パズルのよ うだ。今ま での積み重 ねだから。	スイッチの ようだ。教師 の言葉で子 どもを左右 させるから。	スポンジの ようだ。子 どもたちの 言動・行動 を受け止 めるから。	料理のよ うだ。ひとつ ひとつみく だいていっ て、最後に 合わせる から。			
E	前	芸術のようだ。 作る人しだ いで良し悪 しが決まる。		参考書のよ うだ。人間 の鏡になる ものだから。					
	後	宇宙のよう だ。限界や完 成という言葉 がないもの の。	知恵の輪の ようだ。答え を探しなが ら1つ1つ の方法を試 行錯誤して いくもの。	指揮者のよ うだ。生徒 という演奏 者を探しなが ら1つ1つ の方法を試 行錯誤して いくもの。		自分史のよ うだ。生徒 に自分の持 っている知 識(歴史)を 伝えるもの。		子どもは天気 のようだ。1 日1日、変化 し続け、型 にはまらない もの。	

大きな影響を与えていた。教師を目指す学生たちにとって、これらのイメージや子どものとらえ方は好ましい方向へシフトしていると評価できた。

2 教職意識の変化

教職意識の全員の交流前、1回目（夏）、2回目（冬）の平均得点を図2に示した。大きな変化は見られず、必ずしも交流・学習支援体験によって高くなってはいなかった。

そこで、前、1回目、2回目の合計点の差が大きかった（4点以上）DとGの個人得点の変化を図2-1と図2-2に示してみた。やはり、経験によって一方向に序々に高くなるというよりも、高くなったり低くなったり、また少し戻ったりという変化であった。教職をめざす意識は、短期間に変化するものではなく、具体的な経験によって、迷ったり、考えたりしながら変化していくものと言える。2人とも1回目終了後は2回目もぜひ参加したいと意欲的に希望したことから、低くなった部分を見極めながら、寄り添い見守り、アドバイスしていく必要があると考えている。

また、前より1回目の交流後に「自分のつきたい職業は絞れている」項目が6点から3点に急下降した学生の記述には、「前のアンケートでは私ははっきりと教師になるという目標を持っていて、目指し続ける気持ちでいっぱいでした。今回（1回目）は私のこの1週間を振り返ると、教師になるとははっきりは言えなくなりました。生徒と交流するのは正直楽しかったです。しかし、私を教師の卵とみるととても志が低く感じました。子どもたちと仲良くするだけで学力を上げる手助けのために特別なことを準備してやったわけではありません（中略）私はこの1週間でいろんな自分を見つけました。いろんな子どもたちの表情を見ました。大学の座学では決して出来ない体験をし、教員という職業、自分自身についてたくさん考えさせられました。（中略）ぜひ次回も参加させてください。その時は今よりステップアップした考えを持った私で行きます」と記している。低下した理由は自分自身や教師という仕事と真摯に向かいあった結果であり、今後の成長に大いに期待できると考えている。

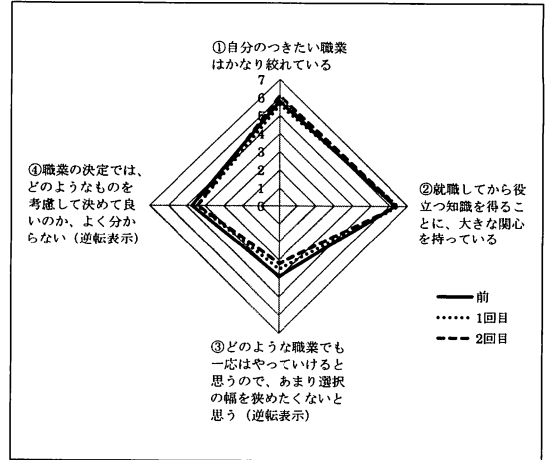


図2 教職意識の変化 全員の平均得点

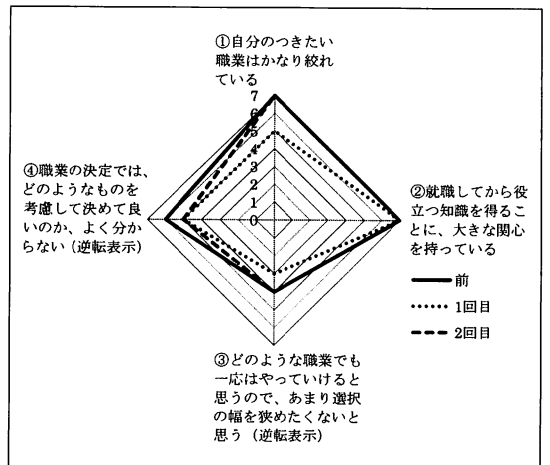


図2-1 比較的差があったD

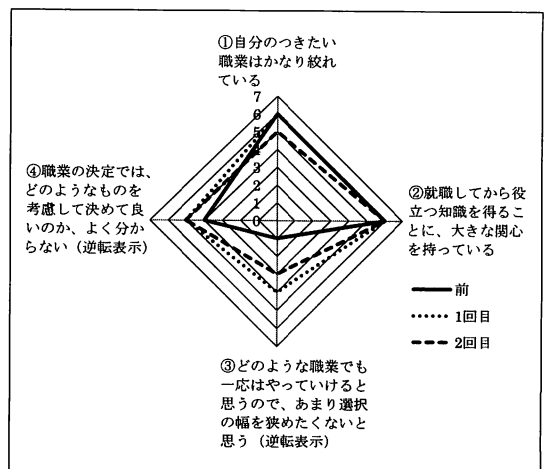


図2-2 比較的差があったG

3 学生自身が記述した離島体験からの学び

自由記述から、離島経験からの学びに関する記述を拾ってみる。

- ・離島での生活は現地でないといけない事だらけでした。教育に関しては本島との違いがはっきり分かりました。やはり離島での教育はとても大変な事が多いと感じました。しかし、離島ならではの良さもあり、自然を使ったものがとても多い気がしました。子どもたちは皆いい子だったので。幸運だなと思いました (A)
- ・離島の1クラスあたりの人数の少なさに驚きがあった。そのため、1～6年生までが兄弟感覚となっており、一体感を感じた。また、教員が草刈りなど作業する事も多い。いろんなことを現場で体験して離島の現状を知ることができてとてもよかった。自分のかかわった子どもたちの成長をぜひ見たい。(B)
- ・子どもたちとのふれあいが多く持てるという面では、とてもメリットが多いと感じました。しかし、情報が少ないということで、本島との差がつくので教える立場としては難しいことが多くなると思った。自分が教えた子どもの成長も楽しみですが、新しい別の子どもたちとも関わってふれあってみたい。私自身も大きくなれるので、また来たい (C)
- ・離島だから人数が少なく、その分個性が強くなるから、ひとりひとりに合わせた学習は大事なんだなと思った。地域の連携がとても強い。似たような子はたくさんいるけれど同じ子は一人もいないとY先生から教えてもらいました。実際に関わってみて全くその通りだと思いました。子どもによって接し方を少し変えることで彼らのやる気を出させるんだと思った。(D)
- ・離島の子どもたちは素直で純粋な子が多く、物事に対しての集中力が大変優れていると感じました。しかし、島特有の時間の流れがあり、授業スピードもゆっくりしているという問題を感じました。1年生を1時間授業に集中させるのは難しく、指導の難しさを知りました。最終日には1年生から手紙をもらい、また来てねという言葉に本当に感動した (E)
- ・離島の授業は、児童数が少ないので静かだと思っていましたが、実際はクラス全員がはきはきと

- 発言していて、とても賑やかで驚きました。マイナスの面もあるけど、全員が生きていて、スポーツにも積極的だとわかりました。島で1・2日は虫も多く、暑く、生活していくのは難しいだろうと思ったけど、今では馴れて生活できる自信ができました。人間関係も結びつきが強く、いいところだと感じました。(F)
- ・今回の交流は宝物となるような貴重な体験となりました。ほとんどの事が初めてのことで、1日1日がとても濃いものになりました。(中略) 複式学級の大変さや小学校から中学校まで仲良しで強い絆を持った児童は沖縄本島ではほとんどないと思います。毎日帰りの車の中で1日あった出来事を興奮しながら話し合いました。この交流は小さいころから学校の先生になりたいという私の夢を思い出させてくれました。(H)
 - ・子どもが好きということ教師になりたい理由にあげていたのですが、今回小学生を教えて、難しく、そんな理由で教師を目指していいのか不安になったし、逆に子どもたちに迷惑なんじゃないかと思ってもっと考えていこうと思いました。今まで、授業というのは教師が前に立って導かないといけないと思っていたのですが、ここではペースの遅い児童に合わせて進めたりして、改めて授業は子どもたちが主役であるということを感じました。また、先生と生徒はある程度距離を持たないといけないと思っていたけど、一緒に釣りに行ってコミュニケーションをとっていたりして新鮮でした。(I)
 - ・離島教育は複式学級など色々難しい点が多いにも関わらず、子どもたちが本当に素直だったのでうまく教える事ができたと思います。わからないときはすぐ、「先生」と言って質問してくれるなど、本島の子どもたちよりも積極的な姿勢が見られたと思います。子どもたちとの交流はとても為になって、自分の成長につながると思います。(J)

はじめの離島、教える経験で、まだまだこれからだが素直な感想であり、私たちが大切にしていきたい教職をめざす芽生えや可能性を感じさせる。離島、特に本島から一番遠く、日本でいちばん都市化が進んでいないと言われる離島での交流・

学習支援体験は、自分自身が育ってきた生活や学校生活とは異なるがゆえに、附属学校などでの体験とはまた異なる新鮮な経験としてとらえられたかもしれない。

彼らに対して、小学校の校長先生からは「教師を目指す学生と純朴なへき地の子どもたちとの交流。子どもたちは関わった分だけ成長するもの。子どもの成長とともに学生さん達の成長も垣間見ることができました。子どものそばにいて子どもに寄り添い、子どもの目線に立って子どもと一緒に笑顔で行動する教師の卵たちが、今後理論を学んでいく中でどのような育ちをしていくのか・・・。楽しみです。」とのメッセージをいただいた。

IV まとめと今後の課題

次ページの図3は、学生たちがポスター発表のためにまとめたものである。ひとつひとつの過程を追いながら聴衆に自分自身の成長を語る姿は、体験に裏打ちされた自信にあふれていた。

与那国島の久部良小・中学校での交流・学習支援体験は学生の「授業」「教師」「教える」イメージを量的にも質的にも変化させた。また、教職意識については、必ずしも交流・学習支援体験によって高くなってはいなかった。しかし、その理由は決してネガティブな理由ではなく、真摯に自分自身や教師という職業と向かいあったためであった。そこで、次稿では学生達の日々の記録をテキストデータとして分析を試みる予定であるが複雑な要素を内包した経験による意識への影響は、単純な数値では表せない部分も多いと推察できた。変化の聞き取りなどの丁寧な対応も合わせて求められよう。

今回は数回ではあるが、Webカメラによる交流を試みた。1度出会った者同士を結ぶツールとしての活用は非常に効果が大きいとの印象を受けた。今後、このような交流も取り入れながら、継続していく方法を模索していきたい。

また、どこの学校でもある課題と離島の学校であることに起因する課題等の整理をし、どのような時期におけるどのような離島体験が学生にとってより望ましいものになるのか、どのような体験が学生の教師としての意識や力量に影響するのか、

離島・へき地の小・中学校現場が大学生に期待する事も含めて大学教員や教育現場、教育委員会を交えた討論も今後の課題としたい。

日常から離れて離島で行う交流や学習支援体験は学生にとって、大変インパクトのある貴重な経験になることはわかったが、旅費の問題が課題としてあげられる。与那国島に限って言えば、昨今の状況では外国ツアーより高い旅費であり、学生に全額負担させることには無理があり、更には、インフルエンザへの対応のために安価な変更不可能な航空券使用ができないこと等実際に学生を派遣・引率指導してわかったダウン(渡難)もあった。質の高い教員養成や大学の地域貢献の立場から、志ある学生を後押しできる継続的な支援制度が望まれる。

学生を快く受け入れ、一緒に育ててくださいました与那国町教育委員会をはじめとして、与那国町立久部良小・中学校の教職員の皆様、児童・生徒の皆さん、保護者の皆様、久部良子ども会の皆様に心から感謝申し上げます。

又、本稿は平成21年度 琉球大学「21世紀沖縄子どもフォーラム」の一部であり様々な面で御助言頂きました事務局の皆様にご感謝申し上げます。

参考文献

- 浅井玲子, 吉田安規良. 2009. 長崎大学教育学部編, 大学と学校現場の連携による離島・僻地教育の推進 三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成, 3-9. 長崎大学教育学部
- 吉田安規良, 八田明夫, 村田義幸, 橋本武夫. 2007. 長崎大学教育学部編, 新しい時代の要請に応える離島教育の革新—長崎大・鹿児島大・琉球大 三大学共同研究から—, 57-70. 長崎大学教育学部

